

「映像基礎教育のあり方とその実践方法について」

研究年度・期間：平成8年度～平成9年度

平成8年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

共同研究者：池内 義幸 佐々木侃司
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
鳥居 元宏 中島 貞夫
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
森田富士郎 井本 雄三
(映像学科 教授) (映像学科 専任講師)
田中 光恵 吉川 幸夫
(映像学科 専任講師) (映像学科 専任講師)

研究助言者：赤塚 滋 荒川 輝彦
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)
井川 徳道 渡辺 貢
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)

研究補助者：浅尾 芳宣 遠藤健太郎
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
公文 理絵 佐藤 貴雄
(映像学科 副手) (映像学科 副手)

平成9年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

共同研究者：池内 義幸 佐々木侃司
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
鳥居 元宏 中島 貞夫
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
森田富士郎 井本 雄三
(映像学科 教授) (映像学科 助教授)
田中 光恵 吉川 幸夫
(映像学科 専任講師) (映像学科 助教授)

研究助言者：赤塚 滋 荒川 輝彦
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)
井川 徳道 渡辺 貢
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)

研究補助者：浅尾 芳宣 遠藤健太郎
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
公文 理絵 佐藤 貴雄
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
中山由美子
(映像学科 副手)

研究経過の概要

1年目の研究域は、短編映画制作の企画、シナリオから撮影に至るまでの、プレプロダクション及びプロダクションの工程である。

基礎教育としての教材素材の検討、案出、制作と資料収集である。初めて16ミリフィルム機材を扱うにふさわしい、基本的作業の行える内容のシナリオを企画、案出すること。撮影準備、撮影、ラッシュプリント・チェックに至るまでの作業それぞれの諸問題を引き出し、具体的解決策を考察していく。

企画、シナリオ



16ミリフィルム作品「おとしもの」

学生（1回生）が撮影できることとして、舞台は大阪芸大キャンパス内であること。配役が学生でまかなえること。室内、屋外の撮影が行えること。セリフをできるだけ少なくすることなどを条件として課し、シナリオを執筆した。

撮影準備

シナリオをもとに香盤（撮影場所ごとにシーン、登場人物、衣装、小道具などをまとめ一覧表にしたもの）を作成し、またそれをもとに撮影日程を組んでいく。

撮 影

今回、限られたスケジュールの中で消化しなければならなかったが、当時舞台芸術1回生の青山麻紀さん、中村真利亜さん、小林篤君、山本光治君、吉村祐樹君の好演のおかげでスムーズに運んだ。

現 像

ラッシュ・プリント（ポジ）で技術面、演出面の問題点をチェックする。問題があれば再撮影の場合もある。

2年目の研究域は、ポストプロダクションである。ポストプロダクションとは映画（映像）撮影終了から作品完成までの数々の作業工程のことを意味する。

それぞれの作業を共同で行い、そこから生じてくる諸問題を引き出し、具体的解決策を考察していく。

ポジフィルム編集

今回、撮影に入る前に絵コンテを準備せず、撮影現場で必要と思われるショットを撮っていく方法を取ったために、フィルムをカットする前に、画像をビデオ変換し、VTRによるオフライン編集を行った。そのデータを元に、ポジフィルムを編集した。

オプチカル・プリント

オーバー・ラップ、コマ延ばし等、特殊な焼き付けを事前に現像所に依頼し、ネガ作成した。

アフレコ

オールロケや諸々の事情で、音声はほとんどアフレコとなった。セリフの他、SE（効果音）もスタジオ等で作成、収録となった。

MA

素材音を映像とタイミングを合わせながら再録音し、セリフ、効果音、音楽をそれぞれシネテープに仕上げる。

スクリーン・サウンド・デジタル・オーディオ編集装置を使用し、足音の効果作成や、微妙な音のバランス調整などに威力を発揮し、作業時間短縮にも貢献した。

ダビング

3本のシネテープをタイミング合わせして1本にまとめる。これが、音ネガ作成の原版になる。

ネガ編集

原版ネガ作成のために、ポジ編集のデータ通りネガ編集し、音ネガと同期させる。

初号プリント

現像所にポジ、画ネガ、音ネガを持込み、プリント仕上げをする。

研究成果について

どの作業工程においても撮影準備同様、またはそれ以上の準備、仕込みの綿密な作業が重要であることが具体的に理解できた。

使用する機器類の十分な事前チェックが大切であり、消耗品については作業内容の熟知からの判断による準備が必要であった。

またそれはシナリオの熟読、理解、深く広い分析に基づくものであり、常にシナリオの中に解答を求めるべきであることが具体的に理解できた。

プリントを2本仕上げることにより、映像面からと音響面からの比較考察が具体的にできて有効であった。

オプチカル作業では、現像所との具体的な指示方法等、現場で見学を兼ねて学べ、また実際に仕上がってくるものを研究資料として作成できた。教材として有効である。

同様に初号プリント作業の折には（実はどの作業工程でも同様に重要だが）感性的、芸術的打ち合わせが、現像所のスタッフ（現場）と行えて、あらためて重要性を認識した。

研究を一区切りするにあたり、我々の研究は映像のリテラシー（読み書き）についてであったことを再確認でき、その重要性を痛感している。

研究の反省

- ・シナリオの読解をどのように指導すべきか
- ・撮影準備を具体的に学生各々にどのように指導できるか
- ・編集作業を具体的に学生各々にどのように指導すべきか
- ・集団作業と個別作業のスタッフ・ワークの行い方、その指導について

上記に例を挙げたような点を研究者個々には理解、判断できているものと考えているが、いまだ共通の指導法、教材の具体的な教示方法などまで研究を進められずに至った。それは各々の個性によって行えるが、共通に確認し合っておくべき基本となるテキストが必要と考えられる。

配役に当たって舞台芸術学科、堀田充規先生、研究室の副手の方々にご協力をいただきました、お礼を申し上げます。